
腐心する人々 ~ レティエイ王国恋物語 4

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐心する人々 ～レティエイ王国恋物語4

【Zコード】

Z0487U

【作者名】

Rail

【あらすじ】

注『レティエイ王国恋物語3』の続編です。

国王ウィリアムと王妃ティアナはあと一歩の距離が埋まらない。側室であるヴァイオレットに励まされ、ウィリアムと向き合うことを決意したティアナだったが、直後に賊にさらわれてしまつ。さらにその現場を目撃してしまつたヴァイオレットもさらわれてしまつ！？

色々と突っ走つてしまつてゐる人たちの話。

■トガツの庭園で（前書き）

今日は割と長いので分割します。男性陣が活躍（予定）。

恋をすると人は変わるといふけれど、猫かぶりなヴァイオレット姫でもそれは同じらしい。

「だから早くウイルとあなたも子作りするべきよー。」

真昼間の庭園でのお茶会だというのに、ヴァイオレット姫はそう力説した。いくらここが王宮の外れにある庭園で、私とヴァイオレット姫の一人きりで人払いがしてあるとはいえ、この物言いはどうなんだろ？ 地金を出し過ぎじゃないだろうか。いや、でもよく考えたらこの人は来た時からこんな感じだったかも知れない。色々と突き抜けている人だ。

「あなたとウイルの間に子供ができれば、わたくしだってクラウ様のところにお嫁に行けるのよ。わたくしとクラウ様の幸せのために、一肌脱いで下さらない？ といつか夜着を脱いで迫つて頂戴」

あけすけ過ぎる物言いに、思わず閉口した。

第三者のこととしてなら私だって笑つて聞いていられるが、ことは私自身に関わる。

「あの、陛下が夜にいらっしゃらないので私にはびつじよつも……」「自分からウイルのところに行つて色落としするぐらゐの氣概で行きなさい。潤んだ瞳でしなだれかかつたら一発だと思つわ。なんだつたらわたくしの国からとびっきりの媚薬を取り寄せましょうか？」

確かに子作りは一人ではできないけれども、私の目の前にいるこの人本当にヴァイオレット姫なのかな。ヴァイオレット姫つて上品

な才媛の王女様じゃなかつたつけ？

やたらと鬼気迫る様子で私を説得してくるので腰が引ける。

以前から陛下と仲良くしろと言つヴァイオレット姫だが、最近はとみに露骨かつ頻繁になつてきた。貴族の女性の間ではまあそういう話題も夜会なんかで出ることもあるが、ヴァイオレット姫がこんな風に言つのは正直かなり意外だ。子作りで、媚薬で。

「そのう、ヴァイオレット様？ クラウ様と結ばれたいといつお気持ちはよく分かるんですけど、どうしてそこまで性急に？」

私が表面上控えめな笑みを浮かべながら尋ねれば、ヴァイオレット姫は眉をキリキリと吊り上げた。

「性急ですか？ あなたとウイルが結婚して何年になると思つて？ 四年よ、四年！ わたくしが来てからもう一年も経つたわ。そろそろわたくしだつて子供が出来ないのかつて故国からせつつかれていますの。あんまり長い間子供が出来ないようであれば、故国の方からなんて言われるか……。それに、それに……！」

一瞬ヴァイオレット姫の顔が悪魔もかくやといひへりこむ恐ろしい形相に変化した。

「クラウ様に……縁談が来てますの」

「それは今までも来ていたのでは？」

陛下がどうとか仕事をどうとか理由に断つていたはずだ。そのせいで陛下とできてるとか色々尊ぶたらしいが。

「ええ。でも今度のは色々としがらみがあつて断れないらしいのよ

そう言つと、ヴァイオレット姫は切なげにため息をついた。ここだけ見たらとても絵になるが、先ほどの恐ろしい形相を見てしまつとその対比がとても恐ろしい。

「クラウ様も断らうとしてくださつてゐるようだけれど、他にいい結婚相手が見つからないのならば一年後にはその方と結婚することになるそうなの……」

そこまで言われて、よつやく思つ出した。調査報告で上がつてきた話だ。

「オールディントン家との縁談ですか？」

私の言葉に、ヴァイオレット姫の柳眉がピクリと動いた。

「ねえ、ディアナ？ 知つてゐるなら協力してくださるわよね。わたくしくしたち、友達だもの」

にっこりと笑つた彼女の笑顔は、それはそれは美しく、それはそれは迫力に満ちていた。普通の女性ならば泣き出しそうなほどだ。クラウは、ヴァイオレット姫のこう言つた顔を見ても好きと言えるだろうか。

いや、ヴァイオレット姫はクラウの前ではトコトン猫を被り続けるだろう。そういう人だ。どんな嘘だつて一生続ければ真実と変わらない。

つてことはこんな目に遭つるのは私だけつてことか。なんだか損をした気分だ。

「そういうのは、陛下にその気がなければ無理でしょ？」

「ええ、そうよ。機会はあるんですけど。積極的に仕掛けてみたら

いかが?」

上品に笑うヴァイオレット姫だが、その内容は割と下世話だ。

「嫌な顔をされるだけだと思いますよ」

私が首を振つて言えば、ヴァイオレット姫はひどく不満そうな顔をした。

そしてふと気付いたように顔を上げる。

「あら、もう時間のようね。また今度お話しましょう、王妃様」

彼女の視線の先には、呼びに来たのであらう侍女が見えた。ようやく解放されるとあって、内心で胸をなでおろした。

「ええ、御機嫌よう」

満面の笑みで言えば、ヴァイオレット姫は一瞬だけ拗ねたような顔になつた。

本当にこの人は地金を出して来ているなあ。

ヴァイオレット姫を見送つて、私は一つため息をついた。

別に世継ぎを作ることはやぶさかでない。現在ブルネット家の計画は大々的に変更を加え、以前の『王を斃す』という計画は中止となつた。代わりに王妃とそれに連なる立場を利用して周辺の領主や国との繋がりを作つてからの計画を練つてゐる最中だ。王を斃すとはまた違つた方向性であり、しかし以前と同じくらい大規模なもの

になる予定だ。それこそ世界征服レベルの。

国のトップはすぐ変えることなく、裏で権力を掌握する。国をまたいでの陰謀、なんと胸の躍る計画だろう。もしも私が王子と王女を何人か生めば、次期国王はもとより将来的に婚姻関係を使って他国との強力な関係を結ぶことも可能ではないか。その中でブルネット家の息のかかつたものを送り込むことも可能になるだろうし、情報提供者も探しやすい。

長期的な陰謀は根気が必要だが、その分大きなことが為せる。その可能性の大きさにブルネット家の若い世代が大いに張り切っている現状だ。

ただそのためには私が世継ぎを作らなければならないが、陛下にその気がない現状では、いかんともしがたい。

一応私もブルネット家の女なので、男性をその気にさせる手管などは一通り習つたのだが、相手が陛下では通用するか怪しい。過去に國一番の高級娼婦に秋波を送られたのに一顧だにしなかったという話もあるし、初夜の時ですらことに及ぶ前に見切りをつけられたぐらいだ。

……考えてるとどんどん落ち込んできた。

頭を振ると、暗い方向に行きそうになる考えを追い払った。

一応私は正妃なんだし、ヴァイオレット姫の言うとおり、当たつて砕けろの精神で挑戦してみるのもいいかもしない。

というか、失敗を恐れて何もしないなど、策謀家の名折れ。計略もなく無為に日々を消費することほど恐ろしいことはない。ならばいつそ、危険を冒してでも挑戦すべきだ。

よしんば木端微塵に砕けたとしても、ヴァイオレット姫が骨がらいは拾ってくれるだろう。

立ちあがつて自室へと足を向ける。ティーセットの後片付けは侍女がしてくれるから問題ない。

そこで違和感に気付いて足をとめた。

ヴァイオレット姫とのお茶では、基本的に人払いをする。ヴァイオレット姫がそう望むからだ。

しかし私が正妃という立場である以上、常に最低限の護衛は近くに控えているはずだ。それに普段は姿を隠して護衛してくれているブルネット家の者も。

ところがそういうた護衛の気配が、ない。

ヴァイオレット姫とお茶を始めたころにはいたはずだ。

ヴァイオレット姫が去つていった時も、確かに一人はいたはずだ。

急いで人を呼ぼうとした瞬間、腕に鋭い痛みが走った。

「つ……！」

腕に吹き矢のようなものが刺さっている。鈍く光るそれを引っこ抜いて投げ捨てたが、何か痺れ薬のようなものが塗つてあつたのか、頭がくらくらとする。

「誰かつ……！」

叫ぼうとした瞬間に、突如として現れた男に口をふさがれ、みぞおちに拳が叩きこまれた。強烈な打撃に息が止まる。視界に膜がかかつたように判然としない。

抵抗も出来ないままにさらにどこからか現れた男達から口に臭い布を突っ込まれたかと思うと、頭に袋をかぶせられて視界を奪われた。複数人に体を押さえられているため、まともな抵抗が出来ない。

まずい、一体誰の差し金だ？

拡散しそうになる意識の中で必死に頭を巡らせるが、逃亡の糸口も犯人の目星もつかなかつた。

口にねじ込まれた布にしみこまされた薬のせいで、私はそのまま意識を失つた。

ヴァイオレットの受難

智謀に優れるというブルネット家の人物でも、色恋に疎いということはあるもののね。ディアナつたらウィルが自分のことを好きだって分かつてないみたいなのよね。わたくしが言つてもあまり信じてくれない様子だし。ウィルは割と分かりやすいと思うのだけれど。

その辺もやはり、ウィルがヘタレで勘違いされやすいということは原因のかしらね。ディアナの話を聞く限り、彼女もウィルのことはとても評価しているみたいだし。常に冷静沈着で、頭が切れて決断力に優れたカリスマのある王だつて。

……みんなどうして気付かないのかしらね。謎だわ。野外の実習に水筒を持つていくつもりで酒瓶持つていくようなドジなのに。鳥に襲われて硬直しちゃうような子なのに。割と運だのみでここまで来たこともあるのに、それが全て計算づくに見えるのは国王つて肩書きがそう見せるのかしら?

でもそのへタレつぶりがばれてないからディアナに愛想を尽かされてないんだから恼ましいわ。

ともかく、クラウ様の結婚の期限が一年後に迫つてゐるし、お子ができたと分かるまで最低でも三ヶ月くらいは必要だもの。早くディアナには世継ぎを作つてもらわなくては。

最近の様子を見ていれば、ディアナ自身もウィルを憎からず思つてゐる節がある。といつても、意識し出したつて程度みたいだけど。でも詳細は分からぬけどブルネット家が長年下準備をしてきた計画もあるでしょうし、そう単純にはいかないみたいなのよね。なにより子作り云々は本人同士の問題だから、少なくともディアナがその気にならなければね。ウィルが襲うつて手もあるけれど、あの意

氣地なしのウイルがそんなこと出来るとは思えないし。

「ディアナもいつそ子供を作つてその子供に国を取らせようとしているのに。なぜそちらの方に計画を変えないのかしら。それともすでに変更しているけれど、わたくしの情報網に引っかかっていないだけなのかしら。それともウイルとの仲が進展しないから？」
ウイルにも十分発破を掛けているのだけど、あのへタレつぱりだしうみ薄よね。もつとこう劇的に、ディアナがウイルに恋をするような状況を創り出さなければいけないのかしら。燃えるような恋が始まること、何かが。

歩いていてふと思いつ出し、足を止めた。

そういえば、庭園に持つていった扇を茶器のところに置いたままだつたわね。午後からも使いたいし、取りに戻らなくては。

庭園では、まだディアナが座つて物想いにふけっていた。ウイルとのこと、考えてくれてるのかしら。

ディアナが立ちあがつて、わたくしから見て右の方へと歩き出した。自室に戻るのだろう。

と、わたくしが回廊から一步踏み出そうとした時、ディアナが足を止めた。そしてはつとした顔になり、何かを言おうとするよう口を開けたかと思うと、腕を押さえて前かがみになった。

何が起つたの？

ディアナは腕に刺さつたらしい何かを引き抜いて捨てた。助けを求める前に五人の黒衣の男が近付き、ディアナの口をふさぐ。そしてディアナのみぞおちに拳をめり込ませた。

そのまま男達はディアナを手慣れた様子で攫う準備をしてくる。

宮中で、なんという失態！ 護衛たちは一体何をしているというの！？

わたくしが人を呼ぼうとした瞬間、リーダーらしき男がこちらの存在に気付いて武器を構えた。

徒手では厳しいものがあるが、わたくしの護衛も近くにいるし、ディアナを助けなければ。せめて応援が来るまでの時間稼ぎを。

「人を呼んで！」

背後に控える兵士を確認してから、敵を見据えた。
が、

「申し訳ありません」

突然、背後から衝撃を受けた。

「な……」

よろめきながら体を捻つて自身を攻撃した人間を見る。

私を攻撃した男は、確かにいつもわたくしを護衛していた男だつた。

「見られたんなら、一緒に連れていくぞ」

護衛の男とは違う声がすぐ背後で響いた。

直後に首筋に針が突き立てられた。この臭い、南方の強力な麻痺薬だ。下手をすると一生障害が残るというのに！

急速に四肢が弛緩していく。汚い袋をかぶせられ、男の肩に担がれた。

「放しな、さい」

「ほう、喋れるのか」

直後に、体が浮いた。そして男の肩に腹が叩きつけられる。小さくうめき声が漏れた。

「大人しくするのが身のためだ」

その言葉を最後に、意識が闇へと沈んだ。

ヴァイオレットの受難（後書き）

野外の実習に水筒を持つていくつもりで酒瓶持つていく
た人間に水のつもりであげたら気付け代わりに
鳥に襲われて硬直しちゃう 鳥さんの目的が別のところにあつ
たので逆に手を出さないでよかつたといふことが判明 倒れ

みたいな感じで評価が上がるウィリアム。運も実力の内つていう
ことですね。

急報（前書き）

大体視点が変わるので、話を区切つてこるので、話題が変わつてから
さが違つています。あしからず。

王宮は規律を重んじる。緊急時以外に宮中を走るべからずという規則も、当然ながら王宮にいる全ての人間が心得ていた。といつても、兵士たちの鍛錬場の近くでは、どうしても血氣盛んな連中が走つたりしていたりする。私の幼馴染の……といふか腐れ縁のディックなどはしょっちゅう宮中を走るので、何度も注意したか思い出せないほどだ。脳みそが筋肉でできているのか、私の注意は一日と経たないうちに奴の頭の中から追い出されているようだ。

とはいって、ノックすら忘れて王の執務室に走り込んでくるというのはただ事ではない。

「申し上げます！ 王妃様とヴァイオレット様が何者かによつて拉致された模様です！」

ディックの言葉に心臓が止まるかと思つた。

「……どうにつけだ

陛下が低い声で尋ねる。その迫力にディックは思わずといった様子で膝をついて頭を下げた。

「はっ。本日午後、お二人がお茶会をされた直後に行方が分からなくなつており、護衛の兵士五名も何者かによつて殺害されているのが発見されました……」

一の句が継げなくなつた。

王妃についている護衛もヴァイオレット様についている護衛も、

当然ながら王宮にいる兵士の精銳たちである。ディックほどの天賦の才はなくとも、厳しい訓練で鍛えられた彼らが一介の賊程度には負けるはずはない。

だといつのに、全員死亡だと…?

「状況は」

陛下が端的に尋ねた。その理知的な目の奥では、いくつもの事柄が飛び交っているのだろう。

「はっ。護衛についた兵士からの定時報告が上がらず、また二時から行われるから、ディーアン国大使とのお茶会にヴァイオレット様がいらっしゃらなかつたために搜索を行つたところ、庭園付近の茂みに隠された兵士の死体が発見されました。王妃様の護衛の兵士も発見され……」

ディックの顔がゆがむ。

「お二人が庭園でお茶会を行つた以降の足取りがつかめず、お姿も確認できない状況です」

現在の時刻は一時半。確かヴァイオレット様は一時から王妃とお茶をするとおっしゃつていたはずだ。となると、一人がいなくなつたのは午後一時以降、午後二時以前ということになる。下手をすればお二人がいなくなつてから一時間以上経過していることになる。

陛下は眉間に深く皺を刻むと、考え込むように窓の外へと目をやつた。

「脱出経路は限られているが、王宮の外に連れ去られている可能性が高い。早急に捜索範囲を広めろ」

「は？」

「ティックは顔を引き締めると、執務室から飛び出していった。そして、

「クラウ、お前は王宮内の貴族でティアナを排除しようと動いている人間を調べ上げろ。今回のこととは何者かが手引きした可能性が高い」

「陛下は今回の賊の狙いが王妃様であると……？」

「恐らくは。急げ」

「かしこまりました」

部屋を出る直前、ちらりと伺い見た陛下は眉間にしわを寄せ、小さく誰かの名前を呟いていた。

手掛かり発見

國の要である王宮で、王妃と側室がいつぺんにさらわれるなんて前代未聞だ！殺されたアデルだつてジーンだつて、俺の部下の中ではかなりの実力の持ち主だつた。それを一気に殺されたとなれば、相手は相当の手練に違いない。完全に玄人の仕事だ。

しかしある程度隠していたとはいえ、兵士たちの死体を隠していなかつた以上、相手はこの事件のことを徹底的に隠peiする気はないようだ。

となれば、死体がなかつた以上、さらわれた二人は生きている可能性が高い。

内心の焦りを押さえて、城下に降りる。王宮の警備は頑強だ。陛下の言ひとおり、逃走ルートは限られている。

伊達に普段城下に降りているわけではない。賊が使つた可能性が一番高いルートを中心に、俺と部下は町での聞き込みを始めた。

早く一人の足取りを掴まなければ……！

「ディック様？」

突然、よく知つた声が聞こえてきた。

振り返ればジュリーが驚いたような顔で俺を見ていた。

ジュリーというのは俺がよく行く酒場で働いている少女で、まだ十代半ばぐらいだろうに郷里を離れて一人健気に働いている。非常に泣き虫で、その泣き顔は非常に庇護欲をそそる。守りたくなるはかなげな雰囲気というんだろうか。

つて、俺は何を考えてるんだ。今は仕事だ仕事！

「どうかなさったのですか？」

ジュリーが心配そうに尋ねてきた。
滅多に見ない彼女の表情に、自分がどれほど切羽詰まつた顔をしていたのかを悟る。

「いや、大したことじゃない」

冷静を装つて否定するが、ジュリーの愁眉は開かない。

「何か私に出来る」ことがあれば、協力は惜しません。言ってください」

ジュリーが言い募る。

その様子に胸が熱くなるのを感じつつも、俺は冷静に尋ねた。

「午後一時から一時くらいにかけて、不審な人間を見なかつたか？」

俺が言つと、ジュリーはしばらく考え込むようにつづみいていたが、やがてはつと目を見開いた。

「そういえば、一時前くらいだつたかしら、妙な馬車を見かけました」

「妙な馬車？」

俺が言つと、ジュリーは「うへり」とつづいた。

「はい。裏路地に止まつていたんですが、随分と大きな麻袋を背負

つた人が入つていつたんです。馬車が立派だったので、どうしてこんなところにつて変に思つたんですけど、馬車が立ち去つた後にこれが……」

ジュリーが差し出してきたのは、地味なラリエットだつた。

薄紫の紐で編まれたそれには、細かな細工の施された宝石がちりばめられている。ぱつと見には地味でそうとわからないが、じらされた意匠のこれは相当な値段のものだろ。

乱暴な扱いを受けたのか千切れてしまつてゐるそれは、確か今朝王妃がつけていたものじゃなかつたか……！？

「こんなもの、庶民が落とすわけないし……もしかしたら人攫いだつたのかもと思つて恐くなつて。ディック様に相談しようともしかして、ディック様が探していらっしゃるのは……」

不安げにこちらを見上げてきたジュリーは、俺の表情を見て息を飲んだ。

「なんてこと……！ 私があの時誰かを呼んでいれば……！」

ジュリーの双眸に涙が浮かぶ。

「君のせいじゃない。だが君の情報は重要な手掛かりだ。もつと詳しく話してくれ」

俺がジュリーの肩に手をおいて言つと、彼女は目を潤ませながらもしつかづつとうなずいた。

手掛けかり発見（後書き）

* ラリエット … 首、または髪にかけるひも状の装身具。留め具がない。プロレス技じゃありません。
「漫画とかでドレス姿の女性が頭に付いているのはこれか！」と一人納得してました。

勘違いを誘発する人

ディアナがさらわれた。
その知らせはあまりに衝撃的過ぎてどこか現実味がないように思えた。

意識が雲の上に行ってしまったかのような浮遊感があつて、時間の経過も気付かないほどだつた。自分が何を喋つていたのかすら思い出せない。頭が真っ白になつていたのか、はたまた現実逃避をしていたのか。

窓から空を見る。穏やかに流れる雲はあまりにもいつも通りで、それがなんだか腹立たしかつた。

気がつけば執務室にはクラウとディック、それから何人かの腹心の臣下たちがいて、テーブルの上の書類を睨みつけていた。

そこには地図と、何人かの名前が載つたリスト。

ディアナたちの足取りは僅かだがつかめた。犯人の可能性がある人物たちも。しかし、そこから先を確定する決め手がないのだとう。

話が行き詰まり、先ほどから重い沈黙が場を支配していた。

ふと、ディアナたちは本当にさらわれたんだろうか、という疑念がわいた。

見張りの兵士が殺されたというのも全て嘘で、実は皆で自分を担いでいるのではないだろうか、と。

現実逃避だとは分かっているが、どうにも認めがたい現実だつた。

ディアナと共にヴァイオレットも消えたといつ。

彼女は見た目はああでも、武術の腕前はそちらの兵卒よりずっと

上等だ。女でなければ というか、王族でなければ一流の騎士として活躍できただろう。

その彼女ですら一緒に姿を消した。相手がそれほどの手合いだったのか、はたまた……？

考えてながら執務机に置いてあつたペーパーナイフを手慰みする。

考えてしまえば嫌な想像ばかりが浮かぶ。

二人は無事なのか、犯人の目的は何なのか。動機はなんだ？

焦燥感を振り払つように、手を振つた。
と、トスつと軽い音がした。

音の方に視線を向けると、テーブルの上に紙を広げて顔を突き合させていた臣下たちが全員こぢらに顔を向けていた。
彼らの中心部、テーブルの上には見事に突き刺さつたペーパーナイフ。

……どうやらついかり持つていたペーパーナイフがすっぽ抜けて刺さつたらしい。

この緊急時になんと間抜けなことをしてしまつたのかと顔が引きつりそうになる。

というか、自分は何をやつていてるんだ。皆真剣に模索してくれているといふのに。

とはいゝ、今自分があそこまで行つてペーパーナイフを引き抜くのも間抜けだ。非常に気まずい。

「…………それを片付けておいてくれ」

なんとか取り繕つて言ひも、臣下の凍りついたような表情はなかなか戻らない。

どうしたものかと悩んでいると、いきなり止まっていた時間が動き出したかのように人々が動き出した。

「例の馬車が走り去つた方向には、オールディントン家の別荘がある」

「あそこは当主は否定していたが、お抱えの傭兵集団がいるつて噂だ。十分備えをして出発を」

「オールディントン家の人物なら動機も十分だ。こつちは証拠を固めておく」

「じゃあ俺はお二人を」

「任せた」

短くかわされる会話の意味は分かるが、どこから犯人の名前が出てきたのかは分からない。

オールディントン家については最近どこかで名前を聞いた気がするが……？

ともかく、ディアナたちの居場所が分かつたのならやることは一つだ。

「俺も行こう」

妻と友人を取り戻しに。

繋がった糸

ディックが掴んだ王妃のラリエットと怪しげな馬車の目撃情報と
いう手掛かりによつて、犯人たちが使つた逃亡ルートと大まかな行
き先が分かつた。

そして私が調べた犯人候補リスト。お一人を誘拐する理由があり
実行に移せる人間で考えると、犯人候補はかなり絞られる。

しかし、犯人の決め手やお二人の居場所といった重要なところは
未だ分からぬままだ。

犯人からの要求はない。ということは、お一人を返すつもりがない
という可能性もある。もしくは、帰つて来たころにはお一人は冷
たくなつてゐるか。

王妃はともかく、ヴァイオレット様はあの美貌と高貴な血筋。犯人
が血迷わないとも限らないのだ。犯人候補をしらみつぶしに当たる
時間はない。それに犯人候補となつてゐるのはほとんどが力のある
貴族ばかり。むやみに疑いをかけて調べるわけにはいかない。少し
のミスが後の命取りとなりかねない。

気持ちばかりが焦る。

議論は行き詰まり、有用な意見も出ない。地図と人物リストを睨
みつけたまま、皆一様に黙り込んでいた。

と、突然空氣を裂く音がしたかと思えば、陛下の愛用しているペ
ンパーナイフが人物リストに書かれていたサイラス・オールディン
トンという名前に突き刺さつた。

サイラス・オールディントンといえば、少し前までは王宮でも権

力を持っていた大臣だ。

ただし前にある不祥事がきっかけで大臣という地位を失い、左遷されている。

ディックの聞いてきた話によると、不審な馬車を引いている馬は青毛の馬だったといつ。

レティエイ王国では地方によって馬の特徴も変わる。青毛の馬が多く使われている地方には、オールディントン家の領地も含まれている。

予想される馬車の行き先にも、オールディントン家の所有する別荘があつたはずだ。

それまで繋がらなかつた糸が、陛下によつて一本につながつた。

「……それを片付けておいてくれ」

低い声の命令には、不自然なほどに感情が排除されていた。それが却つて恐ろしい。

あまりの迫力に、思わず息を飲む。ディックも同様のようだ。

しかし凍りついたように動かない私達を見て、陛下が不審そうに眉を寄せたのを見て我に返つた。

急いで頭を働かせる。

「例の馬車が走り去つた方向には、オールディントン家の別荘がある」

「あそこは当主は否定していたが、お抱えの傭兵集団がいるつて噂だ。十分備えをして出発を」

「オールディントン家のの人間なら動機も十分だ。こつちは証拠を固めておく」

「じゃあ俺はお一人を

「任せた」

伊達に長い付き合いなわけではない。ディックと短いやり取りをして今後のことを見つめ。

「俺も行こう」

陛下が足を踏み出す。それだけで空気ががらりと変わった。

「御意！」

ディックは膝をついて頭を下げた。

陛下が出でられるのならば、王妃もヴァイオレット様も無事だらう。

「クラウ、後は任せた」

「御意」

武官でない私には、お一人の救助活動に向かつことができない。たとえ向かったところで足手まといになるのがおちだ。

そのことが歯がゆい。だが、陛下たちならばきっとお一人を助けてくれると確信できる。

私は私に出来ることをしなければ。

目覚めた場所は

白濁した意識の向こうで、誰かが自分の名前を呼んでいるのが分かつた。

その呼びかけに応えようと思つても、目が開かない。やがて呼びかけに焦燥が混じってきたかと思つと、首筋に圧迫感を覚えた。首を絞められているというよりか、どこかを指で押されているような

「ディアナ、起きなさい！」

ヴァイオレット姫の声に目を開けた。

珍しく焦り顔のヴァイオレット姫が私の顔を覗き込んでいる。

「ヴァイオレット様？ どうして」

起き上がつて周囲を見る。知らぬ間にソファに寝かされていたようだ。

誰か貴族の屋敷の一室なのか、木造のそこはいささか悪趣味な調度の部屋だった。クッショーンやソファーにもカーテンにも全て金糸がふんだんに使われており、装飾品も金銀宝石が大量に。实用性に疑問が浮かびそうなランプは、それ一つで庶民が十年は遊んで暮らせそうなほどの高価な品だ。金はかかっているという以外、部屋の装飾には共通点が見られない。

ビロードのカーテンの向こうに窓があつたが、鉄格子ががつちりはまつていた。

そこでようやく私は意識を失つ前のことを思い出した。

そうだ、何者かに拉致されたのだ。しかしヴァイオレット姫はその場にいなかつたはずだが。

「忘れものを取りに戻つたら、あなたがさらわれそうになつてゐるのを見つけたのよ。人を呼ばうと思つたら後ろから殴られて……！」

ヴァイオレット姫は悔しげに顔をゆがませる。武術に秀でた彼女の背後をとるなんて、大した腕前の持ち主だ。私が驚いているのが分かつたのだろう。ヴァイオレット姫は眉根を寄せながら補足してくれた。

「正面から来る賊に気を取られている隙に、わたくしの護衛の兵士に襲われたのよ」

「まさか」「でなければこんな醜態をさらしていませんわ」

忌々しそうに、ヴァイオレット姫は言つ。

彼女の護衛といえば、王宮での腕っこきの騎士のはずだ。大抵は貴族、そつでなくとも信頼のおける人物のはずなのだが。

「つまり、犯人は相当な権力を持つてゐる人物なんですね」「でしょうね」

「じゃ」とヴァイオレット姫と囁き合つ。

「わたくしもそうだけれど、多分あなたに使われたのも南方の強力な麻酔薬なの。量によつては障害が残る強力なものだし、覚醒のツボを刺激しても一向に目が覚めないから心配したのよ

「あ、ありがとうございます」

となると、目覚める前のあの違和感はツボを刺激されたことによ

るものか。体にあるツボを刺激すると色々な効果があるとは聞いたことがあるが、ヴァイオレット姫の教養の深さにはつくづく驚かされるばかりである。

しかし南方の麻酔薬か。吹き矢にもそれが使われていたのか？

「外から錠前が掛けられているようだし、あなたは目を覚まさないし、困っていたのよ。ディアナ、あなたつて武術は得意？」

「……油断させての奇襲なら、ヴァイオレット様は犯人に心当たりが？」

「ないわ。でもわたくしたちをさらつたのは相当な手練よ」

ヴァイオレット姫が険しい表情で言つ。彼女がそういうならば、相手は相当なのだろう。私を拉致する時にも五人ぐらいはいたし、人数的にもこちらが不利だ。まして私達は女な上動きにくいドレス姿。

「油断を誘つて首謀者を人質にとりましょうか？ それがいいわね」

ヴァイオレット姫は笑顔で過激なことを言つ。彼女ならば出来そうだが。

「救援を待つという方法もあります。さすがに王妃と側室、両方がいつぺんに消えたとなれば捜索されるはずです」

無難ではあるが、確実でもあります。あの陛下がヴァイオレット姫をさらわされて手をこまねいているだけとは思えない。

が、

「わたくしをこんな目に合わせた下郎にはお仕置きが必要でなくつ

て？」

「口ニ口笑うヴァイオレット姫は目が本気だ。

そういうえばこの人サディストだつたな。プライドも高そつたし、相当頭に来てるんだろうな。私をさらつた奴らと同じ奴にやられたのなら、口の中に小汚い布を突つ込まれたのだろうし。王族の姫君に対する仕打ちとしては噴飯ものだ。

「でも戦いづらくなりませんか？ 徒手ですし」

「ドレスは女の戦装束よ！」

「そ、そうですか」

個人的には犯人が姿を現すのを待つて、目的やら何やらをじつくり聞きだして打開策を練りたいところだ。どうせ私たちを無傷で縛りもせずにこの部屋に放置している人間だ。考えの甘い浅はかな人間に違いない。ヴァイオレット姫と協力すれば誘導尋問も楽々だろう。

それに肉弾戦つてブルネット家のカラーではないし。

知略と心理作戦、そして優秀な部下や扱いやすい有象無象を使つて相手を追い詰めるのがうちのやり方である。華麗にしてスマート、己の才覚と運が試される胸躍る試練だ。時に効率よく、時に粘り強く取り組む人生の目標。

ゆえに殴り倒すという選択肢はなるべくなら最終手段にしたい。相手が手練だと分かつてはいるのならば、こちらの分も悪いことだし。今でこそ無傷であるが、多勢に無勢。やけを起こした犯人側に殺害されないとも限らない。そもそも犯人側の目的すら分かつていなければだから。

「これはひとつ、情報収集をしながら機を窺つべきだろ？」

……問題は、この田の前で殺氣だつているヴァイオレット姫をいかにして宥めるかだ。

と、タイミングが悪いことに分厚い扉が開いた。

怒りのヴァイオレット

経験は力となるもの。学んだことは実践できて初めて身になる。医学や薬学を学ぶ上で、わたくし自身にもその効果を試したことがあつた。

わたくし自身が暗殺の危険が付きまとう王族だから、そういうた薬物に対する耐性をつける訓練もしていた。だから意識が戻るのにはそれほど時間がかかるなかつたはずだけど、目覚めたわたくしは自身の置かれた状況に歯噛みした。

趣味の悪い部屋の中にはわたくしとティアナの一人だけがいた。どうやら絨毯の上に転がされていたようだ。すぐ傍にソファもあるところに何なのかしら、この扱いは！ レディに対する気遣いがないんじゃない？

麻痺薬の影響で、未だに頭がくらくらする。手足の末端の痺れが残っているけれど、これはすぐに解消するはず。念のためひじや手にあるツボを刺激し、血行を促しておきましょう。

体の節々が痛い。相当乱暴に運ばれたみたいね。手足に打ち身もあるようだし。顔に傷が付いていなければいいのだけど。クラウ様に嫌われちゃう。確認しようにも部屋の中に鏡はない。

傍らで眠るティアナを確認してみる。呼吸は穏やかで、顔色も良好。脈の乱れもない。着衣の乱れもないようだから、特に何かされたわけではないようだ。ひとまずは無事みたいね。

部屋の中を確認してみたけれど、見張りらしい人物はいない。舐められたものだ。ただ、部屋の入口の扉は外から力ギがかけられているらしく、押しても引いても開かなかつた。高価な家具類はそのまま置いてあるからそれを使えば武器になるのでしょうかけど、

窓には鉄格子。それも高い場所に横に細長いものがあるだけだから、そこからの脱出は難しそうね。

壁に掛けられた絵画には、裸で抱き合つ男女が描かれていた。雰囲気を盛り上げるために寝室にそういう絵を飾ることは聞いたことがあるが、幽閉用の部屋に飾るにしては似つかわしくない。描写が呆れるくらい正確だから、学術的にはいい資料になりそうな絵画なのだけれど。ここを持ち主の趣味の悪さがうかがえるわ。

ディアナの意識が戻っていない。ひとまずはソファに寝かせておきましょう。

小柄なディアナはわたくし一人でも十分に持ちあげられる。わたくしがやろうと思えばクラウ様でもできるでしょうけど、そんなのいちいち言わなくつたって誰も困らないわよね。

猫足のソファはディアナぐらいならば楽々寝られるくらいの大きさがあった。一つほど大きなクッションがあったのでそれをまくら代わりにディアナの頭の下においてはみたんだけれど、デザインや色のバランスよりも豪華さに重点が置かれているのであろうそれは、その表面のほとんどが金糸でできているため触り心地が悪かった。我慢してね、ディアナ。

ディアナの様子を見ながら考える。

わたくしがさらわれたのはあくまでも誘拐の現場を見てしまったから、なのよね。でも口封じのためならばあの場で殺しておけばよかつたはず。それなのにわたくしは無傷でディアナと共に攫われた。

このことが犯人にとって想定外の出来事だったとは考えづらい。

なにしろわたくしの護衛に犯人の息のかかつた者を紛れ込ませていたのだ。偶然にしては出来過ぎよ。なぜその人間がわたくしが誘拐現場に向かつたのを止めなかつたのかは疑問だけれど。

それにしたつてわたくしとディアナをいつぺんに攫うことができるたのだから、準備は入念にしていたはずだ。

犯人にとってまずいことを喋られないようにといふのはもちろんでしようけど、わたくし自身に利用価値があるから攫われたのだろう。

犯人が紳士なら良いのだけれど、下種だつた場合は身の危険が迫つてゐるわよね。既成事実を作られた日にはことだわ。クラウ様のところにお嫁に行けなくなつてしまふ。気を失つている間に追加の薬品が使われていなければ僥倖だけど、ここはあくまで相手の領域。不利なことに変わりはない。

とにかく、ディアナには起きてもらわなくては。作戦を立てる必要もあるし。

ディアナを介抱していると、体のあちこちが痛むのが分かつた。わたくしを攫つたあの男、覚えていなさい！ 改めてディアナの体も確認してみるが、やはりあざがある。頬にも引っ搔いたようなみみずばれがあつた。これはきっとウイルが怒り狂うわね……

髪に麻糸がついているのを払つてやりながら、ふと気付いて自分の髪を確認する。

やはりと言つべきか、麻糸がついていた。よく見ればドレスにも。

……あの男たち、このわたくしを、このわたくしをつ！ 麻袋に入れて運んだというの！？ ジャガイモみたいに！

あの男達も犯人も、わたくしを攫つたことを後悔させてあげなくては。

泣いて許しを乞つても許しはしないんだから。

絶対に犯人達の思い通りになんていかせない。レティエイ王国とネルマリア、両方の力を使ってでも徹底的につぶしてあげる。

そのためにはまず、ディアナを起して現状打破のために動かなければ。

あれこれと試してようやくディアナが目を覚ました。

時間もないのに早々に今後の動きを決めようとしていたところ、ディアナが目を覚ましたのを見計らつたかのようなタイミングで人がやつてきた。

「ご機嫌いかがかな、レティ？」

入ってきたのは脂ぎった小太りの男だ。この脂ぎった顔、見覚え

があつた。

「わたくしたちが上機嫌なように見えて？ オールディントン伯爵」
わたくしたちを攫つた犯人は、わたくしの大つ嫌いな、世界で一番鬱陶しいと思っている家の当主だった。

「あなたの目は目の前の出来事すら『写さない』節穴のかしら。ああ、だからこんな愚かなことをしたのよね。きっと頭の中もあなたの目同様に空洞なんでしょうね」

笑顔で毒を吐けば、オールディントン伯爵の顔が引きつる。女性からの侮辱には慣れていないらしい。仮にも元大臣だものね。今までさぞや女性たちにもてはやされてきたのだろう。彼の背後に控えている傭兵はポーカーフェイスのままで、感情が読めない。

なんにせよ、この程度の嫌味ではわたくしの腹立たしい気分は收まらないのよ。

「ついにこのお馬鹿さんの口を軽くさせるのはおだてるのが一番だけれど、そんなお優しい手段を使つつもりはないの。

怒りだつて十分に口を滑らせる潤滑油になつてくれるんだから。

小者の独演会

事態は予想していたより悪いようだ。
姿を現したオールディントン伯爵に、私は舌打ちをしたい気分になつた。

「ははは、状況が分かつておられないようですね。いざれはヴァイオレット様も私に感謝するようになりますよ」

ヴァイオレット姫の先制攻撃からなんとか態勢を立てなおしたら
しいオールディントン伯爵はにやにやと笑う。

オールディントン伯爵は、五十歳を過ぎた小太りで脂ぎつたいか
にも好色そうな男だ。一度は商売の失敗から伯爵家を傾かせたが、
政略結婚を経て伯爵家を立て直した人物でもある。

血統を重んじる男で、彼自身にも傍流ではあるが王族の血が流れ
ていた。自身に王族の血が流れているから血統主義になつたとも言
う。私が王妃になつたとき、強硬に反対していた一人でもある。

そもそもこの男は以前に自分の娘を王妃に据えようと画策してい
たが失敗していた。しかし彼の娘というのは四人いるのだが、当時
で一番上が九歳、一番下が三歳とだというのだから無茶もいいとこ
ろだ。

さらにはネルマリアの王女であるヴァイオレット姫が来てからは
彼女に異常に入れ込みだし、足しげく通つては貢物を献上しては媚
を売つていてもっぱらの噂だった。

オールディントン伯爵は非常に好色として知られていたので、一
時はヴァイオレット姫の貞操の危険を察じた陛下が直々に釘をさし
にいったほどだ。

こうして書くとかなり嫌な男だが、権力に対する執着は並みではなく、それを維持するための政治的手腕もなかなかのものだつた。ゆえになかなか処分ができず、クラウ宰相も目の上のたんこぶと評するほどの人物だつた。しかし最近とある失態が原因で失脚寸前だつたのだが、まさかこんなことをすることは。

ブルネット家の情報網にも引っかかるなんて、一体どれほど用心深く計画を進めていたのだろう？

その用心深いはずの人物が顔を隠さないということは、私達に自分が犯人だとばれても良いということだ。殺されるのか、はたまた喋れないようにされるのか。

オールディントン伯爵のすぐ後ろに控える男は知らない顔だが、私をさらつた賊の一人だろう。油断ない顔つきでオールディントン伯爵の後ろに控えている。

数で言つなら「一対一」。しかも相手の一人は玄人だ。下手をすれば、二人ともすぐさま殺されてしまうだろう。

しかしヴァイオレット姫はどこからその自信が来るのかといふくらい生き生きとオールディントン伯爵を挑発をしている。

「あら、『J自身の意見を深く考えもせずに垂れ流してお子さんにはらされるような愚鈍にわたくしが感謝するですつて？ 拳句の果てにそのことをみつともなくも権力を使って揉み消そうとして失脚しようとしているあなたなんかに？ 面白くない冗談ですわね」

ヴァイオレット姫の言葉に、今度こそオールディントン伯爵の額に青筋が立つた。

いの程度で心を乱されるとは、なんともはや、脆弱な精神である。

彼女の言つとおり、オールディントン伯爵は現在失脚するかしないかの瀬戸際に立つてゐる。といふが、よつぱどのことがなければ失脚することが決定済みだ。伯爵家の方では色々と悪あがきをしているようだが。

そもそも彼が地位を手放すことになるきっかけは、彼の娘の一人が、学校の作文を発表する授業でとんでもないことを発表したからだつた。

要約すると、大臣かつ伯爵である自分の父親が現王妃（つまりは私）を敵視しており、陛下とヴァイオレット姫との御子を望んでゐる、という内容だ。それに付け加えて大臣自身が家庭を蔑ろにし、若い女性を多数囮つてゐるといふことも発表されていた。

おりしも国の教育についての視察団がその学校を訪れている最中。視察団には諸国の専門家も含まれていたために学園内はちょっとした阿鼻叫喚の修羅場になつた。

自國の醜聞を漏らすなど言語道断。それも幼い娘ですら覚えるほどに自分の考えを垂れ流しているなど、その時点では大臣には相応しくない。

最悪なことに、伯爵はその失態を全て担任の教師に押し付けようとした。無駄に権力はあつたので、なんとかなると思つたのだろう。ところがその教師というのがワケありな人で、元は他国のやんごとない身分の女性だつた。

前々から思うところがあつたらしいその教師は、伯爵のこれまで

の所業と合わせて事実を調査団に報告したそな。

その結果、一時は爵位の取り上げや家の取りつぶしすら論じられていたが、諸々のしがらみと合わせた結果、領地と家財を取り上げられるだけで済んだ。一応新たに領地も与えられたのだが、その領地というのがレティエイ王国の中でも王都から遠い遠い場所にあり、領民よりも動物の方が圧倒的に多いという地域だったのだ。見事なまでの零落っぷりだ。その地域の住民には非常に申し訳ないが、陛下の密偵も定期的に派遣されるようになつたという話だから大丈夫だろうということだった。

議論が長引いたことと引き継ぎがあつたことで遅くなつたが、来月には王都を出るはずだったのだが、最後の悪あがきがこれとは。

「ねえ、王妃様も存じでしょ? 」の男の下種な行いは

唐突にヴァイオレット姫から話を振られた。彼女は妖艶に微笑んでいる。

同意しなければ私も彼女に怒られそうだ。彼女の目的も分かるので、ここは合わせよう。

「ええ。確かに女性教師を家に呼びつけて不貞な行いをしよつとしたんでしたっけ? 」

「権力が駄目なら力づくで言つことを聞かせようとした挙句手を出そうとしてその教師に悲鳴を上げられて顔面を思い切り引っ掻かれたからって、出席するはずだった祭典を欠席したのよ。無責任にも程があるわよね」

「そもそも権力を笠に着て女性をビリーハンする方が問題だと思いませんが……」

私の言葉を聞いているのかいなか、ヴァイオレット姫は楽しげに微笑んだ。

「妻となつた女性の実家の威を借りてのし上がつたつていうのに、それを忘れて妻を蔑ろにして、今や僻地で牛や馬のお相手ですものねえ。権力にしがみつく豚にはピッタリじゃなくつて？」

浮氣は男の甲斐性という言葉はあるが、あくまで本妻を（少なくとも建前上は）大事にしてこその浮氣である。家庭を蔑ろにして若い女におぼれているなどと公衆の面前でばらされては伯爵家の面汚しもいいところだ。しいては伯爵の妻の実家の顔に泥を塗ることになる。

加えてオールディントン伯爵家は彼の妻の実家の支援で盛り返したようなものだ。政略結婚といえども恩をあだで返すような伯爵の行為に、妻側の実家が烈火のごとく怒つたのも無理はない。

そう言つたわけで、僻地に左遷が決定したオールディントン伯爵を姻族達は早々に見限つた。妻も子供も実家に戻ることになり、文字通りオールディントン伯爵は単身僻地へと赴かなければならなくなつたわけだ。

零落した伯爵に追従するような人間もいないだろう。

「くつ、そもそも、この雌犬が陛下をたぶらかしさえしなければこんなことにはならなかつたのだ！」

私を睨みつけながら悪々しげに伯爵が叫ぶ。唇がぶるぶると震えている。

……小者すぎやしないだろ？ か、この男は。これだけのことをしでかしたというのに。そもそも、何をしにここに来たんだこの人。自分の言いたいことすらまともに言えていないじゃないか。

つていうか、こんな男が大臣だつたつてレティエイ王国は大丈夫なんだろうか。政治的手腕からは気付かなかつたが、人格に大分問題があるようだ。ちょっと不安だ。

心なしか、彼の後ろに控えている護衛が侮蔑のこもつた眼で伯爵を見ている気がする。

ヴァイオレット姫は鼻で笑つた。

「ウイルがあなたの家の娘程度でたぶらかせると思つて？ あの見た目も中身もあなたに似てしまつた残念な娘たちが？ セめて奥様に似たら中身があれでもマシだつたでしょ？」

……なんだかすごく私怨を感じる。普段はこんなに辛辣じやないのになあ、ヴァイオレット姫。

女性に罵倒されることなど滅多にないのだろう伯爵は、体全体をわなわなとふるわせている。

今にも殴りかかつてきそうな様子だったが、彼の背後に控えた男が咳払いをしたこと、唐突に伯爵はぴたりと動きを止めた。背後に控える男の存在で、自身の圧倒的な優位を思い出したのだろう。余裕たつぱりな表情で伯爵はふんぞり返つた。

「私も娘を陛下の妻になんて今は考えていませんよ、ヴァイオレット様。しかし陛下にこの女の首を届けさえすれば、悪い魔法も解けることでしょう。その下賤な女には今までの報いをたっぷりと受けでもらわなくては。王妃というのは高貴な血筋の方がなるのが当然です」

「この男の考へてる報いというのがろくでもないものであるのは容易に想像がついた。しゃべつているうちに高揚して来たらしい伯爵

は目がらんと輝き、狂氣と欲情の混ざった目がヴァイオレット姫に向けられる。

「もちろんヴァイオレット様にはその女に代わって王妃となつていただく必要がありますからな。無事に王宮へと帰つていただきますよ。未来の御子を宿してね」

ああ、なるほど。そういうことか。

私は納得した。下種の考え方だ。

伯爵の狙いが分かり、私は頭が痛くなつた。

この男はヴァイオレット姫の一体どこを見ていたといつだらう？

それまで侮蔑混じりに伯爵を見ていたヴァイオレット姫の雰囲気が突如変化した。

思わず私が後じさり、護衛についている男が剣の柄に手を伸ばすほどに。

噴き上がるような怒氣と殺氣の発生源は、言つまでもなくヴァイオレット姫だ。限界地点が近いらしい。

「最初は抵抗があるかもしませんが、なに、すぐにヴァイオレット様もこれが素晴らしいことだと気付かれますよ。私の娘たちも地位ある人間の所に嫁がせれば、私が王宮に返り咲くのもあつという間だ！」

醜い表情で笑う伯爵の危機管理能力は一体どうなつてているのか。

ヴァイオレット姫がパニエの下に忍ばせた小剣で伯爵に斬りかかるのと護衛の男が剣を抜いてそれを受け止めるべく動いたのはほぼ

同時だつた。

……ヴァイオレット姫、それ私のパニーの中に忍ばせていた小剣だと思ふんですがいつの間にそんなところに。あ、意識がなかつた時か。

ドレス姿だとは思えぬ速さで一度、三度と結ぶヴァイオレット姫。男もそれに負けじと応戦している。

うつかり命が散りかけた伯爵は顔面蒼白にして扉の位置まではいざりながら逃げていた。

「ディアナ！ その下種を逃がさないで！」

「ええ！」

言われるまでもなく、ヴァイオレット姫が動いた時から私も動いていた。賊ならともかく肥え太った貴族くらいならば体術でなんとかなるはずだ。

事実、私の攻撃は伯爵を絨毯の上に転がせることに成功したのだが、

「おい、緊急だ！」

扉の外に呼びかけたのは伯爵ではなく、ヴァイオレット姫と斬り合っている男だった。

そして予め控えていたかの如く、一秒の時差もなく武装した男たちがなだれ込んできた。伯爵はあつという間に安全圏に連れ出され、代わりに剣を構えた男たちが狭い部屋に十人近く入つてくる。

多勢に無勢、私とヴァイオレット姫は並んで壁際へと追い詰められた。

「ははは、少しばかり驚きましたが、あつという間に形勢逆転のようですね。武器はお捨てください、ヴァイオレット様」

オールディントン伯爵の厭味つたらしい声が響いた。

ヴァイオレット姫は悔しげに顔をゆがめると、大人しく指示に従つた。

それを確認すると、伯爵がゆつくじと歩み寄つてくる。その顔は憤怒で歪んでいた。

「こさかおいたが過ぎましたな、ヴァイオレット様。それにそこの毒婦も、よくも私にふざけた真似を！」

乾いた音がして、頬に鋭い痛みが走つた。

「ディアナ！」

ヴァイオレット姫が悲鳴のよに叫ぶ。

熱いものが頬を伝つた。伯爵の指にはまつた悪趣味な指輪で頬が切れたらしい。

「下賤な女が私に逆らつたことを後悔するがいい」

興奮しきつた伯爵は嗜虐的な笑みを浮かべると、傍らの護衛の剣を抜くと、その切つ先で私の頬をぴたぴたと叩いたのだった。

一か八かで伯爵から剣を奪うという方法もあるが、警戒される今では難しい。不審な動きをすれば周囲を囲つている男たちにたちまち殺されてしまうだろう。

万事休すか……！

完全なる失策だったわ。

傭兵よりも先に、危険を冒してもまずオールディントンを人質にするべきだった。扉の外に見張りがいたとしても、せいぜい二人か三人だろうと思っていたのに、なんて無駄に用心深いのかしら！

武器がない状態でこの人数を相手取るのは難しいわ。まして、ディアナに剣が突き付けられている状態だもの。嫌味つたらしくディアナの頬に当たられる剣には、切れた頬から流れた血が伝っている。女の顔に傷をつけるなんて、この下種は何を考えてるのかしら。ただでさえわたくしに比べたら美人とは言えない顔なのに！

本当に、わたくしが傍に居ながらなんていう失態！

「さて、これからどうしてやろうか？ その泥のよくな色の汚い髪をそき落としてやろうか？ それとも顔を二目と見れないほどに切り刻んでやろうか、それとも生意気な豚にお似合いなように傭兵どもに払い下げてやろうか？」

ヒステリックなオールディントンの笑い声に追従するように武装した男たちが下卑た笑い声をあげる。

駄目だ、このままでは。せめてディアナから注意をそらさないと。剣が突き付けられたままではディアナだって身動きはとれないでしょう。

「オールディントン伯爵、貴方は自分が何をやつているのか分かっていて！？ 彼女にこれ以上の手出しをすれば、貴方だけでなく一族郎党の首が飛ぶわよ」

「ヴァイオレット様、異なことを」

オールディントンは芝居がかつたしげさで驚いて見せた。

「これは陛下のためですよ。ひいては国のため。それが罰されるわけがない」

「自らの欲望をかなえるための行為でしょうー。何を勝手なことを！」

怒りで声が高くなる。

しかしそうするとオールディントンはますます愉しそうに笑うの

だった。

いけない、わたくしが冷静にならなければ相手に余裕を持たせてしまうだけだ。

わたくしは長く息をついた。落ち着いて状況を把握しなきや。

オールディントンの注意がこちらに向いてきているのが、ディアナに突き付けられていた剣は下がりつつあった。ディアナは青ざめて震えていたが、その目にはまだ闘志が宿つており、油断なく周囲を観察していた。この状況でも演技をする余裕はあるらしい。さすがはブルネット家ね。わたくしももつと冷静になりました。

「貴方がそんな自省も自制もでいない人間だから地位を失ったんじやなくつて？ 無能な働き者なんて、害悪でしかないもの。そんな人間なんて、さつさと始末した方が後の世のため人のためよね」

オールディントンの眉が上がる。

この男一人ならば、剣を持っている程度ならわたくしでも対処できる。この男がディアナから離れてこちらに近づいてくればしめたもの。当初考えた通り、この下種を人質にしてしまえばここからの

脱出もかなうはずだ。

問題は、先ほどにもましてこちらを警戒してきている護衛の男なのだけど。一人だけ実力がすば抜けている。あれはどうにかしないと厄介だわ。オールディントンを人質にとつても、ディアナを奪われてしまえば一巻の終わりだもの。

「か弱い女をいたぶつて喜ぶよつた愚鈍を、ジニーの誰が尊敬するつていうのかしら。みんながみんな、零落した貴方から離れていつたのはその人望のなさのせいじゃなくて？ 腹心の部下にだつて見捨てられたじゃないの」

「ばばばと言つてやれば、怒りに震えるオールディントンの剣はわたくしの方に向けられた。

「！」こちらが、下手に出ていれば……

「貴方の言つ下手というのが私兵を使って女性を拉致することなのだというのなら、もう一度学校に入り直して子供たちと学び直してきてはいかが？ 貴方にはお似合いよ」

「くつ！」

オールディントンが剣を振り上げた。ディアナに剣を突き付けていただけでも十分にこの男に疲労を蓄積させていたらしく、贅肉のついた腕はわずかに痙攣していた。チャンスだ。

が、唐突にその剣はおろされた。

何かを思いついたかのようなたぐらみ顔で、オールディントンは嗤う。

「貴女のその気丈さは素晴らしいと思いますよ。しかし田の前で王妃が切り刻まれても同じように憎まれ口を叩けますかな？ おい、その女を」

心得たとばかりに武装した男がティアナをオールティントンの前に突き飛ばす。

ティアナは小さく悲鳴を上げて床に倒れこんだ。
見せしめのつもり? 距離としてはさぞつきつ止められるといひだ
けれど……

「この丑障りな女をえいなれば!」

憎々しげに吐き捨てるど、オールティントンはティアナの髪をわ
しづかみにし、血で汚れた剣でその髪を切り落とした。

はりはりとブルネットの髪が散る。

全身から血の氣が引いた。

「次は手の指を一本ずつ切り落としてやる!」

愉快そうにオールティントンが囁く。

「ねえ、貴女はこうなりたくないでしょ、ヴァイオレット様?」

ねつとつとした声は残酷な響きを帯び、剣はティアナの手へと向
けられた。

その時、

「そこまでだ」

静かな怒りのこもつた声が部屋に響いた。

強い人

「彼女に触れるな、オールディントン」

静かな声がオールディントン伯爵に叩きつけられた。

武器を構えた男達はある者はオールディントン伯爵を守るよう庇い、ある者は声の方へと振り返りうとした。

が、彼らが振り返る前に、鮮やかな一閃がその命を奪う。

鮮血が辺りに散った。

「陛下……？」

半ば呆然としながら呟く。視線が縫いつけられたように逸らすことができない。剣を片手に立つ陛下の姿は、どんな宗教画よりも神々しい。

彼が気付かないとは思つていなかつた。ヴァイオレット姫が攫われているのだ。そして私も。ならば必ず救援の手を差し伸べてくれるだろうと思つていた。

でもまさか、こんな早くに陛下自身が来てくれるなんて。胸が熱い。

何故か涙がこぼれた。

「くつ、お前ら何をしているー 私を守れ！」

オールディントン伯爵が叫ぶが、狭い室内でながものを持つ彼らは背後からの不意の襲撃に対応するのに手いっぱいだつた。

男達は決して弱いわけではなかつたが、陛下は実際に数々の戦に

も赴き、自らの手で自軍を勝利に導いた実力者である。彼らの比ではなかつた。

「退け」

発せられた言葉の持つ威圧感に、場数を踏んでいるであろう傭兵たちですら氣押されしている。

それでも仕事には忠実なのか、陛下に襲いかかつた男達は一刀のもとに切り捨てられた。

生き残つた男達も、陛下の後から入つてきた近衛兵たちに次々と捕縛されている。

「へ、陛下…………これは誤解でつ！」

形成の逆転を悟つたオールディントン伯爵が蒼白になりながら叫ぶ。いつの間にかこの男は持つていた剣を床に放り出して壁に体がくつつくほど後退していた。

陛下はオールディントン伯爵の言葉を聞いているのかいないのか、私の方へと視線を向けた。

それまで凍つたように動かなかつた陛下の表情が僅かに歪む。言葉が漏れる前に動いたのは、あの護衛の男だつた。

男はあらうことか、オールディントン伯爵の襟首をつかむと、陛下に向かつて突き飛ばしたのだ。伯爵が間抜けた悲鳴を上げる。陛下が一瞬そちらを取られた隙を逃さず、男は機敏に動きだした。男の手に握られた剣が襲つたのは陛下ではなく、部屋の入り口から狼藉者の逃亡を防ぐために立つていた近衛隊長のディックだつた。

まさか、玄人の傭兵が雇い主を囮に？　この男、オールディントン伯爵が雇つた傭兵じゃなかつたのか？

「逃がすか！」

ディックが即座に反応し、男の曲刀から繰り出された斬撃を大剣でいなす。この近衛隊長は相変わらず怪力だ。大剣とは思えぬほど軽々と剣を操る。

戦に置いて陛下に次ぐ実力の持ち主といつのは伊達ではなかつたようだ。

しかし敵もさる者。唐突に外から怒声が聞こえた。

近衛隊長が唐突に体勢を崩した。男は近衛隊長の足を切りつけると、そのまま部屋の外へと飛び出していく。他にも陛下の連れてきた兵士がいるはずだが、外から怒声が聞こえてくるばかりで状況がつかめない。

「追え、逃がすな」

間髪いれず陛下が言えば、近衛隊長が足に怪我を負つていては思えぬ速さで駆けだした。

そして静寂が訪れた部屋の中に生存者は四人。私とヴァイオレット姫、そして陛下と今回の誘拐事件の首謀者。ただし首謀者は陛下によつて意識を刈られているよつだつた。手足を微かに痙攣させたオールディントン伯爵が起き出す気配はない。

「…………ディアナ」

陛下が私の名を呼ぶ。

「つむいていた私は肩をびくりと震わせて、恐る恐る顔を上げた。

実際問題、フォローをどうじよつ。」
「そりオールティントンの口封じをしておくべきか。」
「この男を思い切り蹴りつけてしまったし。
それともいまさらか。陛下は全てお見通しだう。

「助けていただいて……ありがとうございます」

語尾が震える。

ふと床に落ちた自分の髪の毛が目に入つて惨めな気分になつた。

長い髪は美の象徴だ。今の私ぐらいためか
罪人くらいなものだう。

ヴァイオレット姫の髪ほど美しくはないが、毎日手入れをしてい
た髪だ。王宮で同情を買うのに使えると頭の片隅で計算する自分が
いるが、やはり悲しい。

視界に陛下の靴が入つてきた。どうやらまたつむいていたらし
い。

「いや」

陛下の手が私の頬に添えられる。視線を上げると、痛ましげな顔
をした陛下を目の前があつた。

「遅くなつてすまなかつた。怪我はないか？　俺がもつと早く来て
いたらこんな顔には合わなかつただろうに、すまない」

沈痛な面持ちでの真摯な謝罪に、思わず狼狽してしまつ。陛下の
手が触れている頬が熱い。

「あ……の……」

上手く言葉が出ない私を見て、陛下はむらむら痛々しげに顔をゆがめた。添えられた手の指に僅かに力が入る。

「本当に遅すぎるわよ、ウイル。どうしてあともう少し早く来なかつたのかしら。わたくしの顔に傷が付いたらどうしてくれるの？」

言葉が出ない私を見かねてか、ヴァイオレット姫が助け船を出してくれた。その言葉もどうかと思うが。

陛下の手が離れる。そのことがなんとなくさびしく感じた。

「すまなかつた、ヴァイオレット。君にも迷惑をかけた」「ついでのような言い方ね」

ヴァイオレット姫はつんと顔をそらす。陛下の眉が下がる。

「そもそも王宮の警備がしつかりしていたらわたくしも『ティアナも攫われたりしなかつたのよ。反省なさい』

「ああ。今後はこのようないじめつけないよ」

気兼ねない様子で喋る一人は、なぜか姉弟のよう見えた。

「……うーん？ 気のせいか？

うつかり考え込んでいる間に、一人の会話は進んでしまつたらしい。気がつくと二人は私を心配そうな顔で見ていた。

「ティアナ、大丈夫？」

「え、あ、はい」

ヴァイオレット姫に声を掛けられて返事をする。ふいに陛下の手が私の頭をゆるやかに撫でる。

「オールティントン、むごいことを

低い咳きが聞こえて、かつと全身の血が上ってぐる気がした。

オーレーディントンのせいだとは分かつていても、この髪では式典どころか夜会にも茶会にも出られない。こんな髪の短い王妃なんて、この周辺では聞いたことがない。誘拐された挙句に髪を切られたなど、醜聞もいいところだ。

短くなつた髪を誤魔化すならばかつらを使うべきだらうが、またぞろ周囲がうるさくなるだらう。

うん？ だとすると、それを機にもう一度不穏分子をあぶり出せるはず。いい機会だ。

そもそもオーリテイントンかこんな大それたことをしたといふことは、裏で協力した人間が少なからずいるはずである。宰相のクラウも今頃は調査しているだらうし、そもそも首謀者や監禁場所が早々に割り出せたのならばその一味の割り出しも早いのではないだろうか。

狙い目は捕まらない小者、だろうか。オールディントン伯爵といふ後ろ盾をなくした連中は、次の後ろ盾を探すはずだ。そいつらをブルネット家に取り込めば、今後何かと役に立つのではないだろうか。利益に弱い人間というのは便利だ。それに脅しとしての材料もあるし。しかし王妃誘拐事件の一昧をブルネット家につながりがあるとばれたら狂言だと疑われかねない。だとしたらブルネット家の傍流で探すべきだろうか。やることは多いが、時間がない。早く帰

つてブルネット家に連絡を取らなければ！

新たな計画に消沈していた意氣が再び盛り返してきた。

私は視線を上げると、陛下に向かって弱弱しく笑んで見せた。

「大丈夫です。今はみつともないかもしませんが、髪はそのうち伸びますから」

演技のつもりだったが、感情の制御が上手くいかなかつた。意図しない涙がにじむ。

こんなこと、今までなかつたのに。

「ティアナ……」

陛下の心配そうな声が、心に刺さる。と、ヴァイオレット姫がため息をついた。

「二人とも、何を辛氣臭い顔してゐる。簡単なことじょっ？」

心底呆れた風な聲音に、思わずヴァイオレット姫の顔を見る。ヴァイオレット姫はいつの間に拾つたのか、剣を手に持つていた。

「美の基準なんて」

ヴァイオレット姫は美しい金の髪を左手に持つと、勢いよく刃を引いた。

「自分で作るものよ」

金の髪が舞つた。

自分でやると、ちょっとためらじが出てしまつわね。『ティアナよ
りちょっと長いかしり。

わたくしが短くなつた髪を触つていると、それまで面白いくらい
唚然として固まつていた一人が口を開いた。

「ヴァ、ヴァイオレット様！？」

「ヴァイオレット…？ 一体何を………？」

慌てる一人を見て、わたくしはにっこりと笑う。

「これで髪が短いからってティアナだけがそしられる」ともないで
しう？ 焂は全部そこの愚鈍にかぶせたらいわ」

そうよ。わたくしを下卑た田で見た男なんて、この馬鹿で間抜け
で身の程知らずの男なんて、それくらいの罰を受けるべきよ。

「でも、せつかくお美しい髪だったのに……」

ティアナが蒼白な顔で床に落ちたわたくしの髪を見た。わたくし
は鼻で笑つた。

「南方ではこれくらい髪の短い女性も多いわ。それに美しさという
のは内面から出るものよ。少々髪が短くなつたからといって損なわ
れたりしなくつてよ。それに言つたでしょ？ 美の基準はわたく
しが作るの」

むしろわたくしが美の基準だと思つてゐるけれど、口に出さない

方が美しいわよね。

わたくしの言葉に、二人ははつとした顔になつた。わたくしの意図が分かつたのだろう。

わたくしとディアナ、一人が攫われた。その中でディアナだけが怪我をして髪を切られたとなれば邪推が飛び交うようになるのは火を見るよりも明らかだ。ディアナに対してもわたくしに対しても。ならばいっそ、全てをオールディントンのせいにしてしまえばいい。わたくしとディアナの髪を切つた後にウィルが踏み込んだと言えばいいのだ。ディアナだけならばわたくしが底つてていると思う人間も多いだろうが、揃つて髪が短くなつたならば少しは違つはずだ。狂言で髪を切る女など、この国ではまずいな。

こんな髪になればネルマリアから戻つて来いなんて言われないでしょうしね。

それに、流行というものは上から下に伝播しやすい。

「わたくしは男性からはもとより、女性からの支持も得ている自信があるわ。長い髪もいいけれど、短髪という新しい流行を作るのも面白そうじやなくつて?」

自信たっぷりに微笑むと、ウィルはぽかんとした顔で私を見ていた。まつたくもう、間抜けな顔ね。

ディアナが一本とられたとでも言いたげに笑つた。

「ヴァイオレット様、かつこよすぎますよ

「当り前でしょう」

……もう少し、ウイルを立てあげるべきだったかしら。でもウイルってばどうくさいのよね。さつきだつてティアナを抱きしめてあげたらよかつたのに、触れるだけなんて。本当に気が弱いんだから。待つてたら日が暮れちゃうわ。早くクラウ様にも会いたいし。

「ヴァイオレット、ありがとう」

ようやく頭が追いついたのか、ウイルが言う。
わたくしは微笑みで答えた。

もし側室として相応しくないと言われたら、ウイルにはわたくしがクラウ様のところに御嫁入りする手筈をどんな手を使ってでも整えてもらいますから覚悟しておきなさい。

「ディアナ達を取り返すことはできたが、ござ歸還となると困ったことが生じた。

少數精銳の兵と共に早馬でやつてきたため、帰還のための馬車がなかつたのだ。オールディントンの馬車はあるが、伯爵家の馬車を収奪した場合、誰かに見られたら後々に問題が出てくる可能性がある。だつたら最初から使わない方が無難だろう。そもそもヴァイオレットがオールディントン家のものを使うのに拒否感を示した。ひどい目に遭つたのだから当然だろう。

迎えの馬車を待つといつ手もあつたが、

「そんなもの、馬で帰ればいいでしょ？　わたくしは一人で馬に乗れるし、ディアナはあなたと同乗すればいいじゃない。わたくし早く帰りたいわ」

「ううヴァイオレットの一聲によつて、馬での歸還が決定した。

馬の様子を見ていると、近くの村で調達してきたといつ乗馬服に身を包んだヴァイオレットが近付いてきた。

「ウイル、ちょっといいかしら。ディアナのことなのだけど」

「ああ」

髪を切つた彼女は、確かに以前のよつた女性的な美しさはないが、随分と凜々しくなつたようだ。心なしか言動も変わつた気がする。髪型は随分と人に与える印象を変えるものだ。

「ディアナの顔の傷だけど それほど跡は残らないと思つわ。手当でもしたし」

「さうか、ありがと」

医学に長けた彼女の言つことだ。確かなのだらう。心底ほっとしてお礼を言つと、ヴァイオレットはにこりと笑つた。

「当然のこととしたままでよ」

今も昔も、彼女には頭が上がらない。そして彼女は再び顔を引き締めた。

「ただ、これから王宮に戻る時が問題なのよ

「問題?」

俺が訝しがつて眉をひそめると、ヴァイオレットは氣難しげに顔をしかめた。

「あのね、ウイル。女性にとつて髪を切られるのも顔を傷つけられるのも、とても辛いことなの。ディアナはあの狼藉者たちに蹴られて殴られて髪を切られたのよ? どれだけ辛くて心細いことか」

「……ああ」

「普通の女性でも辛いのに、ましてディアナは王妃で、諸国に名を轟かすあなたの妻なの。あまり自覚はないでしょうけど、あなたの見た目だけを言つなら普通の女性なら隣りに立つだけだって気後れるのよ。分かるでしょ?」

「……そうだな」

自分が不甲斐ないせいでの、ディアナを辛い目に合わせてしまった。

悔やんでも悔やみきれない。

オールディントンを拿捕したところで、未だにティアナをよく思つていらない勢力はある。今までは彼女が周囲から攻撃されることは明らかだ。俺も全力で守るが、それでも上手くいかは不安が残る。

まだティアナとは完全に打ち解けたとは言い難い状況だ。その上彼女の目の前で怒りに我を忘れて剣を振るつてしまつた。きっとまた怖がられてしまつたに違いない。

また避けられるよになつたらどうしたらいいんだろうか。そうなつたら、彼女のために離縁を申し出るべきなのだろうか？いや、それだけは絶対に嫌だ。

「…………分かつていなによつね」

「そんなことは」

「分かつてないのよ、ウイルは」

ヴァイオレットが深々とため息をつく。聰明な彼女のことがだから、俺の至らないところが分かるのだ。

「よく聞きなさい、ウイル」

まるで出来の悪い子供に教える教師のよつて、ヴァイオレットは

言つた。

「今、ティアナは不安になつてるの。ただでさえ容色のことを謗られることが多いのに、今回の出来事よ。きっと大勢の人間が言つわ。『それじゃあ王妃に相応しくない』つて」

「そんなことはない！」

俺が激して否定すると、ヴァイオレットは分かつてゐるとも言

いたげに、頷いた。

「そうよ。でも言われたティアナは不安になる。その不安を取り除けるのは彼女の夫であるウイル、あなたしかいないのよ」

ヴァイオレットの言葉に、雷に打たれたような衝撃を受けた。

「馬上じゃ話しづらいでしようけど、帰る道中、ティアナにしつかりと自分の思いを伝えておきなさい。いいわね」

それだけ言つと、ヴァイオレットは身をひるがえして去つて行った。

自分の気持ち、か……

もしかして、ヴァイオレットはそのために馬で帰ろうとしたんだろうか？

つづづく彼女には頭が上がらない。

馬上でティアナが横座りになるよう抱える。滅多にない程の距離に、鼓動がうるさいくらいになるのが分かった。

顔の傷はヴァイオレットが手当してくれたため、今は小さく切った湿布がはられていて見えない。髪の毛が目立たぬよう、ローブについたフードをかぶっている。

ディアナは俺の腕の中にあるところに、体を縮こまらせて、
むいでいるため視線が合わない。その神秘的な瞳ですらも、田深に
かぶつたフードによつて隠れてしまつていた。

何と声をかけてよいのか分からず、馬を走らせる。

言いたいことはほんとあつたが、上手く言葉が紡げない。

時間は刻一刻と過ぎていき、馬は王宮へと近づいていく。

半分ほど来た時に馬がバテ始めたために、小休憩を取ることにな
つた。

ヴァイオレットの視線を感じたが、それでも俺はディアナに話
かけることができなかつた。

「今ままだとディアナに愛想尽かされるわよ

すれ違こやまにほそりとヴァイオレットが呟く。

ヴァイオレットの言つとおりだ。

確かに今まで多々情けなごとこをを見せたし、今度の誘拐事件で
はディアナを無傷で助けることができなかつた。その上あんな野蛮
なところを見せてしまつたのだ。……優しい彼女を俺の傍に引きと
めるのは酷過ぎるのかもしない。そもそも役立たずの王妃と迫害
されていることにも俺はなかなか気付けなかつた。

そんな俺を見限つて、ディアナが実家に帰るといふこともあるか
もしれない。

そうなつたとき、俺は彼女を引き留める言葉を持つのだろうか？

頭の中で嫌な予想ばかりがめぐつた。

休憩が終わり、再び馬に乗る時にディアナから声を掛けられた。

「陛下、あのお話が

思いつめた顔で、ディアナが俺を見上げてきた。
嫌な予感で体が冷たくなる。

「…………何だ」

緊張して返事をすると、ディアナの顔が曇る。また怯えさせてしまつただろうか。

しかしディアナはまっすぐに俺を見つめてきて、その紅唇を開いた。

「王宮に戻つたらでよいのですが、一度実家に」

「駄目だ」

強い口調でディアナの言葉を遮る。

心臓が早鐘を打ち、冷や汗が出た。やはりヴァイオレットの言つ通り、ディアナに見限られてしまつたのだろうか？

「しかし……」

「駄目だ」

再び言い募りつとしたディアナを遮る。

一度言われてしまえば、それを覆せる気がしなかつたからだ。

今、言わなければならぬ。今、伝えるべきだ。

俺は自分を鼓舞すると、ディアナを抱きしめた。

「へ、陛下………？」

ディアナが慌てたように身じろぎをする。しかし俺はさりげに腕に力を込め、強く抱きしめた。

「ディアナ、君は俺の妻だ」

腕の中のディアナがぴたりと動きを止めた。

「」の先どんなことがあつても、君は俺の唯一の妻だ

情けなくも、手が震える。

「だから、」にも行かないでくれ。愛してる」

「……」

返事がない」とに焦る。

「ディアナ……？」

かすれ氣味の声で尋ねれば、ディアナがおずおずと顔を上げた。

潤んだ瞳が俺を見つめる。ディアナの顔はつらら紅潮している
ように見えた。

「これは、期待してもいいのだろうか。
ディアナを見つめていると、背後から少々大きめの咳ばらいが聞
こえた。

「非常に申し訳ないんだけれど、あなた方が出発しないことにほ
たくしたちも出発できないといふことを忘れないで頂戴ね？」

ヴァイオレットの言葉にはつとして周囲を見渡せば、周囲には一
緒に連れてきた部下たちが気まずげな顔で立っていた。

…………しまった。

今更状況に気付き、顔が熱くなる。
ディアナも赤い顔で恥ずかしそうに顔を伏せていた。

もう少し状況を考えるべきだった。

しかし折角ここまで言つたのだから、ちゃんと全部自分の気持ち
は伝えたい。

と言つても馬上は落ち着かないし、狼狽した弾みにじこじう間
違えるか分からぬ。落馬してしまえば俺はともかく華奢なディア
ナだと大怪我をしてしまう。

帰つてからは事後処理もあるし、ディアナも髪を整えたりするだ
るつ。

となると、

「……続きは、また夜に」

俺がそう言つと、ディアナがますます赤い顔になつた。周囲の部下たちがわざとらしく顔をそらす。

何か変なことを言つただろうか？

「さあ、話が終わつたなら出発しましょー！」

ヴァイオレットが手を叩いて促す。俺は頷くと、ディアナと共に馬に騎乗したのだった。

何故かディアナの体は先ほどよりも格段に強張つていた。
……これはどっちの意味なんだろうか。

誘拐されたお二人は陛下が救出し、帰還された。

ローブのフードを口深にかぶった王妃はずっと陛下に抱えられたためか、馬から降りると少しふらついたようだった。陛下が女官長と少し話をしたあと、王妃はそのまま女官長に連れられていった。

「陛下、『じ無事ですか？』

不敬だとは思いつつも尋ねずにはいられない。

陛下は少々疲れの見える表情をしていたが、力強く頷かれた。

「事後処理は俺がしておく。ヴァイオレットを頼む」

それだけ言われると、陛下は私の肩を叩いて足早に去っていかけた。

何故か乗馬服に身を包んだヴァイオレット様は私の顔を見て一瞬顔を強張らせた。

「ヴァイオレット様、『じ無事でしたか？』

その言葉にヴァイオレット様は辛そうな微笑を浮かべられた。

「ヴァイオレット様……？」

私が近付くと、まるでそれを拒むようにヴァイオレット様が乗馬

帽子を取つた。帽子に押し込められていた髪が垂れる。

思わず愕然として息を飲んだ。

あのお美しい髪が、無残な程ぱつさりと切られていたのだ。長く豊かだった金髪は、今や肩口ほどまでの長さになつていた。

「ヴァイオレット様……なんてお辛い……」

犯人が誰かなど明白だ。オールディントンめ！ 全身の血液が沸騰しそうなほど怒りが沸き上がる。怒りで体が震える。

「……クラウ様は、こんなわたくしを見て幻滅されましたか？」

気がつけば、ヴァイオレット様が泣きそうな顔で私を見ていらした。普段は凜としたたたずまいのヴァイオレット様が、今にも壊れてしまいそうな危うさを纏ついていた。

思わずヴァイオレット様の手を握り、引き寄せる。

「そんなことはありません！ 私は、私の気持ちは、ヴァイオレット様の姿形で左右されるようなものではありませんー。」

言い切つてからはつとする。

私は今、とんでもないことを言ひてしまつたのではないか？
じわじわとヴァイオレット様の手を握る手に熱が集まつてくる。

「クラウ様つ……」

ヴァイオレット様の瞳からぽろぽろと涙がこぼれる。

その痛ましげなヴァイオレット様を慰めようと、体が勝手に動い

た。ヴァイオレット様の手を引いて、腕の中に閉じ込める。ヴァイオレット様は私の胸元に縋りついたまま、嗚咽を堪えるように体を震わせていた。

異国に側室として来て、今回の誘拐、それにこの髪。どれほど心を痛められていることだろう。

「他人間が何と言おうと、私は貴女の味方です、ヴァイオレット様」

ヴァイオレット様が僅かに身じろぎをした。

「もしわたくしが側室として相応しくないと追放されても……？」

その言葉にビクリとした。

万が一でもその可能性がないとも言えない。

といふことは

心中で邪な考えが頭をもたげた。

恐れ多い考えだ。しかし

「その時は 私の伴侶になつていただけますか？」

喉がからからになるほど緊張しながら問いかける。ずるい質問だとは思いながらも、聞かずには言われなかつた。

ヴァイオレット様はゆるゆると顔を上げ、涙の乾き切つていない瞳で私を見つめた。その顔には驚愕が表れている。

出過ぎた言葉だったろうか、嫌われただろうかと後悔がよぎった。
が、

「はー！ 喜んで！」

弾けるような笑みで、ヴァイオレット様がそう言つて下を向いた。
幸せすぎて怖いところは、じつじつ状況のことを言つただろう
か。

たまらずにヴァイオレット様を再び抱きしめた私は、自身の望外
の喜びに胸を震わせた。

ヴァイオレット「計画通り」

くそ、全身が痛む。

俺は痛みをこらえながらベッドの上でうめいた。

王妃とヴァイオレット様の帰還から一日。あの男との斬り合いで負けた俺は全身に怪我を負い、入院するはめに陥っていた。あんな賊に遅れをとった上に取り逃がしたとあって、痛みも倍増だ。

あの傭兵らしき男とは何度も斬り結んだものの、最初の不意打ちで足にけがを負ったこともあり、こちらの動きが鈍つて結局賊の腕に傷を付けた位で深手を負わせることもできなかつた。それどころか反対にこちらが何度も斬られた挙げ句逃がしてしまつたなんて、近衛隊長の面目丸つぶれだ。あんな強い奴の名が知られていないことは驚きだが、自分の力量不足に恥じいるばかりである。陛下は首謀者は捕まえたから構わないと言つてくれたが、俺が構う。怪我が治つたら、一層の修練をしなければならない。

病室で俺は一人うめぐ。

今回の誘拐事件で入院するほどの重傷を負つたのは俺だけというのも情けない限りだ。

他の連中は自力で馬に乗つて帰つている中、俺はまともに馬に乗ることもできず、荷物よろしく部下の馬にくくりつけられて帰つてきた。出発前にヴァイオレット様が侍医顔負けの治療してくれたのはいいが、帰りの道中ですっかり傷が悪化してしまつた。踏んだり蹴つたりだ。

陛下は王妃と途中からいちゃいちゃしてゐるし、帰つてきたら帰つてきたりでクラウが周りの目も気にせずヴァイオレット様にプロポ

一ズしてゐしヴァイオレット様も喜んでるし……

昔からクラウってそういうところあるんだよな。田の前に集中しきて周りが目に入つてないつていうか。

でも仮にも側室の女性に大勢の前でプロポーズつてどうなんだ? 受けるヴァイオレット様もどうかと思うが。普通だつたら反逆罪だか不敬罪だかで首をはねられてもおかしくない暴挙だぞ。

でも陛下は一人のこと応援してる節があるんだよなあ。別にひがんでるわけじゃないけどさ。お美しい姫君に抱きしめてるのが羨ましいとかそういうわけじゃないんだ。

ただ、今思つうんだ。なんで俺の見舞いはむさい男ばかりなんだ
と。

入院して早一日。見舞いにきたのはすべて部下の野郎どもと陛下と王妃、そしてクラウとその付き添いのヴァイオレット様だけだつた。王妃とヴァイオレット様は女性だが、あんな甘い空氣を出された状態で来られても俺が気まずいだけだ。

田頃は懇意にしている女性たちも一向に現れる気配がなくその薄情さに嘆くばかりだ。修練は医者に止められているし、陛下からも体を早く治せと言われている。

しかし個室で一人ベッドの上で天井を見つめている以外ないなて退屈すぎて死にそうだ。

そう思つてゐると、病室のドアを誰かがノックする音がした。

「どうぞ」

声をかけると、扉がためらいがちに開いた。

入つてきたのは、

「ジュリー!？」

意外な人物に俺は目を丸くした。

ジュリーは手に小振りのバスケットを持って俺のベッドへと近づ

いてくる。

「ディック様……お加減はいかがですか？」
心配顔のジュリーが言つ。

俺は意外な来客に驚きながらも笑顔を作つた。

「ああ、なんてことないさ。普段から働きづめだから、せっかくだし休養しろって陛下のお心遣いでね」

わざと明るく言つと、ジュリーの愁眉が開く。

「よかつた。お怪我をなさつたつて聞いて、心配で心配で……私が王妃様が攫われた時に何かできていたら……」

ジュリーの目にうつすらと涙が浮かぶ。俺は彼女のこの涙に滅法弱いのだ。

「大丈夫だつて、ジュリー。君が気にすることないよ。来てくれてありがとう。見舞いに来るのが野郎ばかりでうんざりしてたところだつたんだ」

「まあ、ディック様つたら」

俺がおどけるとジュリーはくすくすと笑う。

そう、じつにうの。俺が待つてたのはじつにうのなんだよな！
ふと会話が途切れると、ジュリーはもじもじと恥ずかしそうにしてこちらを伺つた。

俺が首を傾げると、ジュリーは頬を染めながら意を決したように持つてきたバスケットを開けた。

「これ、よかつたら差し入れなんですが……」

そういうて彼女が取り出したのは、俺の好物であるアップルパイだつた。

「もしかして、君が？」

「お口に合えばいいんですけど」

ジュリーははにかんだ笑みを浮かべた。

彼女が準備してくれたので、さつそくパイを一口食べてみると、

「うまい！」

俺は思わず嘆息した。

「店に並んだつておかしくないくらいおいしいよ、ジユリー。」

「本当ですか？ ありがとうございます」

ジユリーは真っ赤な顔で照れたように笑う。

なんつて健気な子なんだ、ジユリー！

もしかして俺に氣があるんだろうか？ でもジユリーは世間知らずでうぶっぽいから男に免疫がないだけかもしないし……でもこれは勘違いじゃないんじゃないだろうか。

俺はジユリーにこりと笑いかける。

「ジユリー やえよければ、怪我が治つたら一緒に遠乗りでも行かないか？ アップルパイとワイン持つてさ」

目がこぼれおちるんじゃないかと心配なくらい目をまん丸にしたジユリーは、真っ赤な顔をさらに紅潮させて、目をせわしなく左右へと泳がせる。

「あの、その、えと……」

「ちーっす、お邪魔しますタチヨー……って、何病室に女の子引つ張り込んでるんすか！？ 怪我してんのに盛りすぎますよー！？」ノックもせずに部下たちがぞろぞろと病室に入ってきた。

く、いいところで邪魔が入った。

「え、もしかしてこれからいいことあるとこでした？ 俺たちお邪魔虫？」

「なんにしても怪我が悪化しない程度にしてくださいね」

口々にかけられる遠慮のない言葉にジユリーが首筋まで真っ赤にさせた。

「あの私、失礼します！」

口早に言つと、ジユリーは一歩散に病室から逃げて行つた。持つていぐのを忘れたらしいバスケットだけがぽつんとベッドの傍に残る。

「…………お、ま、え、ら、なあ！」

俺がギリギリと歯を食いしばって言うと、不穏な気配を察知した部下たちが及び腰になる。普段からフランクな付き合いをしていたのがこんな形で仇になるとは。

「全員今日から修練は両手足に例の重りつけてやれ！ たら全力でしごいてやるから腹くくつとけ！」

「隊長、そりやないですよー。」

「八つ当たりじゃないっすか！」

「うるさい、つべこべ抜かす

部下の不満の声を聞きながら、俺は深くため息をついた

ジューーには逃げられたけど、あれは脈ありついでいいんだよな?

でもうふたから恥ずかしくて逃げられたこともありうるし、嫌われた可能性もあるし……

退院したら即ジュリーのところに行こう。

もう言い訳とかはなしだ。あんな健気で可愛くて俺の身を一生懸命心配してくれる女の子なんて早々いない。

正面突破で口説く以外道はない。待つてろ、ジュリー！

その後の報告

報告書を渡した俺は、雇い主の前で膝をつく。

「 以上のようになり、ディアナ様と陛下の仲はこれを機に深まり、闇も共にしたようです。宰相の婚約話はオールディントン家の取りつぶしにより白紙に、また、ヴァイオレット・ネルマリアの降嫁も陛下の取り計らいによりほぼ確定したものと」

俺の報告に、雇い主は満足そうに笑った。

「御苦労さま。他の傭兵たちに情報は漏れていません？」

「はい。捕縛された傭兵たちも、事件の首謀者がオールディントンだと信じて疑っていないようです。感づいたものは全てこちらで始末しました」

「痕跡も？」

「はい。ブルネット家が今回の王妃誘拐の黒幕であるということを感じているものはおりません。なにぶん、ディアナ様がオールディントンの手によって怪我をなさっていますので」

「そう。あの男もいいことをしてくれたものね」

クスクスと笑う目の前の雇い主に、俺は慄然としたものを覚えた。見た目はどう見ても十代半ばの少女にしか見えないこの女は、実の姉の命すら危険にさらす計画を立て、実行したのだ。何のためらいもなく。この女だけではない。王妃を除くこのブルネット家の人物全員がだ。

「ディアナ姉様も、行動が遅いのよ。男に心を奪われて決断力が衰えるようなら、世代交代するのが一番でしょう？」

報告書に目を落としながらブルネット家の末の娘はそのはかなげな容貌の眉ひとつ動かさずに言い放つ。

「今回の件でオールディントン家は取りつぶし。それに協力した三

家の貴族も遠からず何らかの処分を受けるでしょう。開いた地位にブルネット家の息のかかつた貴族を送り込む準備はできているし、正妃にとって代わる可能性のあったヴァイオレット・ネルマリアの脅威も取り除けた。王妃と国王の絆は深まり、御子の誕生も近いでしょう。そうなれば、ブルネット家の地位はますます確固たるものとなる」

王国への不満がくすぶつっていたオールディントンを焼きつけ、そくと知られぬよう手筈を整え、今回の事件を起させた。不自然にならぬ程度に介入して事件が解決するよう誘導し、オールディントンの動向を監視させるべく一番身近な護衛として俺を送り込む。

すでに十分の地位を持っているだろうに、貴族というのは理解しがたい生き物だ。

「あなたも大したものね。近衛隊長を打ち負かすなんて。腕はもう大丈夫なの？」

「はい、おかげさまで。最初の奇襲が功を奏しました。ご支援感謝します」

「なんのことかしら」

涼しい顔で雇い主は言つ。見張りの傭兵はあの時すでに全員殺されていた。近衛隊長たちは気付いていないようだが、あの時近衛隊長の背後から不意をついて体勢を崩させたのはブルネット家の手の者ということだ。大方計画が失敗しないように見張らせていたのだろう。

「報酬は弾むわ。これからもよろしくね」

そう言つて雇い主はにこりと笑う。

と、ノックの音がした。雇い主が許可を出すと、彼女の腹心の部下が部屋へと入ってくる。

「ジュリエッタ様。条件に合う者が見つかりました」

俺の姿を認めた男は一瞬口を止めたが、雇い主の視線に促されて続けた。

「先代の事業の失敗で財政が傾いている男爵家で、娘は遠方の商家

に行儀見習いと云ふことと下働きに出されているようす

「娘の顔を知つてゐる者は？」

「十歳に家を出されたきり、親族で顔を見たものはおりません。商家からも転々として冷遇されてゐるらしく、友人もほとんど」

「そう。好都合ね」

雇い主は控えめな笑顔を浮かべる。その台詞と表情が面白いくらいにちぐはぐだ。

「それじゃあ早々にその娘と私の戸籍の交換の手配を」

「……伯爵家の令嬢が男爵家に？」

小さく囁くように洩れてしまつた咳きを、雇い主は耳をとく聞きつけた。

鋭い視線で俺を射ぬくと、他言無用と言い置いて彼女は言つ。「いくら鈍いディック・アームストロングでも、結婚相手がジュリエッタ・ブルネットじゃ不審に思つでしょ？」

そう言つて、雇い主はクスクスと笑つた。

虫も殺せぬような顔をしているくせに、女は魔物だ。
俺は体を震わせた。

その後の報告（後書き）

「お愛読あつがとうございました！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487u/>

腐心する人々 ~レティエイ王国恋物語4

2011年10月10日18時24分発行